

〔特集：地域と民族の生活文化〕

## 雲南回族の歴史と文化<sup>1)</sup>

History and Culture of the Hui People in Yunnan

馬 京

MA Jing

中国雲南大学人類学系助教授

*Anthropology Department, Yunnan University*

*E-mail: ymj63829@public.km.yn.cn*

### Abstract

This paper systematically introduces the migration and development history of the Huis in the periphery areas of Yunnan Province, China. The author's discussions cover the distribution of the people, their religious beliefs and sects, and also make clear the conditions of their culture and folk customs, such as clothing, housing, food, ritual activities, religious education and economic life.

いわゆる「回族」とは「回回民族」の略称であり、その人口は中国55民族の中で第三位を占める。全国各省市、自治区に広がり存在しているが、主として寧夏、甘肅、青海、新疆、河南、雲南、河北、山東等の省区に人口集中の度合いが高い。とりわけ、「綺麗」「豊饒」な雲南に多く居住している回回民族は、彼らの持っている知恵と勤勉さによって、そこに独特な回族の歴史と文化とを創り上げてきた。

1) 本稿は2003年3月10日(月)に愛知大学国際コミュニケーション学会主催で開催された第23回国際学術交流プログラム・第4回イスラームにおける中国研究会における講演記録にもとづいている。主催者の鈴木規夫教授、通訳の徐幃さんに感謝を申し上げる。

## I. 雲南回族の概況

### 1. 基本情況

中国全土の回族人口は約900万人、そのうち雲南省における人口は64万人弱で、雲南省総人口の1.4%を占めている。その90%以上の人々は都市や町および内陸の山間盆地に居住しており、山地、半山地および辺境周辺に住んでいるのは10%に満たない。農村では回族自らの村落が作り出され、都市では回族が集中して住む通りや町が形成されており、いわゆる「大分散、小集居」の構えとなっている。

回族は雲南省全省で25存在する民族の中で、回族の分布状況は最も広く分散しており、全省128の県市の中で、昭通地区の綏江（スイチャン）を除いた各地に回族は居住している。1万人以上の回族人口を有する県（市）は16、その他の県では、平均1万人以下で、その中の11の県（市）では人口百人未満となっている。回族は全省各地に分散しているが、一つの県（市）にほとんど「集族居住」するかたちとなっている。農村では、ほとんどの場合一つの村またはいくつかの村に集中して居住しているが、他の民族と共に一つの村で居住していることもある。

主要な分布地域は、個旧市の沙甸区（サーデン）、開遠市の大庄回族郷（ターツォンホイツイション）、建水県の回龍（ホイロン）、玉溪市の大營（ターイン）、峨山県の文明（ウンミン）、大白邑（ターペーハ）、硯山県の平遠（ピンユアン）、永平県の曲硯（チュウトォン）、巍山県の永建（イオンチエン）、大理市の柯里庄（クーリツォアン）、洱源県の士膨（スパーン）、鷄鳴（チイミーン）、三枚（サンミュイ）、通海県の納古鎮（ナクツン）、大回村（ターホイツイウン）、小回村（ショウホイツイウン）、下回村（シャホイツイウン）、昭通市の守望（ソオウウォン）、魯甸県の桃源（タァオユアン）、会澤県の新街（シンチュエ）、尋甸県の柯渡（クートウ）等である。

回族が比較的集中する都市や町のほとんどには、自らの「街道」（居住区）が形成された。例えば、昆明市の順城（スンツン）街、金牛（ジンニユ）街、珠玑街、昭通市の毛貨（マオホオ）街、東昇（トンスン）街、大理市の文明街等である。

雲南回族では、中国全土の回族同様、漢語を本民族の共通語として用いている。しかし、その族源の多元性のゆえに、現在の日常生活のコミュニケーション手段の中には依然としてアラビア語とペルシア語の語彙が残されている。例えば、「伊瑪目」（イマム）、「色倆目」（スーリヤンムー）、「乃瑪茲」（ナイマツ）、「海拉目」（ハイラアムー）、「也帖」（エティエ）等等である。または、回族しか使わない漢語語彙もある。例えば、「真主」（ツンツウ）、「帰真」（グウェイツン）、「定然」（ティンラン）、「口喚」（コウハン）等等である。

雲南は多民族の省である。したがって、広く分散した状況に置かれている回族は、主たる漢民族との雑居以外にも、白（ペー）、彝（イ）、苗（ミャオ）、納西（ナシ）、藏（チ

ベット)、傣(タイ)等の兄弟民族とも錯雑居住しつつ、お互い緊密な連係を保っている。そのため雲南回族の言語と文化は、漢族の強い影響を受けると共に、必然的に他の民族からの影響も受けているといえる。例えば、大理柯理庄および洱源県の土膨、鷄鳴、三枚等の村に居住している回族は、周辺はすべて白族の村であるため、日常生活の中で白族言語を通用するようになっている。西双版纳傣(シーサンパンナ・タイ)族自治州勐海(モンハイ)県、曼賽(マンサイ)両寨の回族は、傣族の服装を着用し傣語を使う。迪慶藏族自治州の回族は、藏語を話し藏族の服装を着る。

伝統によって、新生児が誕生すると阿訇(アホン)(清真寺内最も学問を有しかつ品格が高く、人望ある存在)を招いて新生児にアラビア語の名前をつけてもらう。その名がいわゆる「経名」である。これらの名前の多数は、イスラーム世界に広がるムハンマド、マフムードなど先人、賢人の名前である。アラビア語の名前にはそれぞれに意味がある。例えば、「穆罕默德」(ムハンマド)、「易トラ欣」(イトラシン)、「艾里」(アイリ)、「ルサ」(ルサ)、「法图麦」(ファトゥマイ)、「阿依舍」(アイサ)等にはとてもよい意味が含まれている。これらの名前は一般的に回族家庭の中でも、また特殊な信仰儀礼の場などにおいても使われている。

雲南家族の氏姓の一部は漢族の氏姓と基本的には同じである。例えば、馬姓は回族の中で最も多い姓であり、「十個回回九個馬」(10人の回族の中で9人は馬という姓をもっている)ということわざがあるくらいである。しかし、同じ馬姓でも様々な支系によって、徹格的に区別されている。例えば、通海県納古鎮の古城村では、馬姓が長房馬、二甲會馬、新坟馬と金族馬の四つに分かれている。

長期間にわたる歴史の発展にともない、回族の人々が次々に他民族と結婚することによって他の氏姓もたくさん回民族の中へ進入してきている。例えば、魯(ル)、趙(ツァオ)、李(リ)、張(ジャン)等である。通海県納古鎮古城村の魯姓は始祖が魯元晨(ル・ユアンツン)という人であり、原籍は四川巴県で、明朝洪武31(1398)年に古城村に定住した。長い共同生活のうち、魯姓一家はイスラームに帰依し、その後古城村に魯姓が現れた。洪武年代には回族李姓が陝西風翔府から古城村に移住してきている。

回族の氏姓の根源をたずねると、やはり彼らの祖先の氏姓とかかわっているため、回族特有な氏姓を形成している。例えば：納姓は主に賽典赤・瞻思丁(サイド・シャムスディーン)の末裔で、その姓を持っている人々が最も多く集居する場所は通海県の納古鎮である。ほかに、この納姓と関連する氏姓には、丁(ティン)、速(スウ)、賽(サイ)等がある。さらに、哈(ハ)姓、鎖(ソ)姓、米(ミ)姓等も回族特有の氏姓である。

巍山県の「馬米廠(マミツァン)」という村は、ほとんど馬姓と米姓の人々で形成されているが、この両姓共に自分たちの清真寺(イスラーム教寺院)を持っている。馬姓清真寺と米姓清真寺である。

## 2. 宗教教派

雲南回族の人々は全体的にイスラームへ帰依している。したがって、イスラームが、回族の風俗習慣と民族文化に対して深い影響を与え、回族の形成と発展に重要な役割を果たしてきたことはいうまでもない。

回回民族は「族教一体」で一つとなった民族である。すなわち、「族」はイスラームの基盤であり、イスラームは「回回」の中核である。もし、イスラーム伝来がなければ、回回民族形成にまでは至らなかったはずである。雲南へのイスラーム伝来は回回人の雲南への移住によるものである。

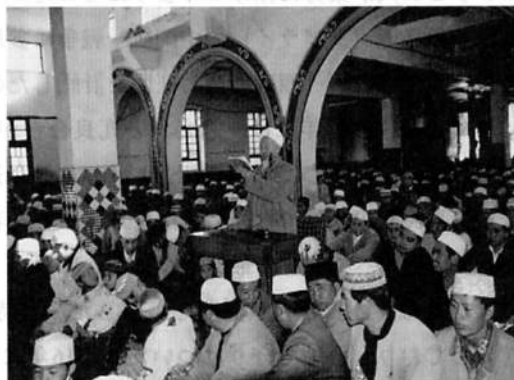
イスラームの基本的信仰はクルアーン（「清真言」）において概括され、「万物非主，唯有真主；穆罕默德是主欽使」（「アッラーは唯一の神，万物の主である。ムハンマドはアッラーの使徒である」）。具体的に言えば，六大信仰（神「真主」，天使「天神」，啓典「經典」，使徒「聖人」，来世「復生」，定命「前定」）と五行（信仰告白「認」，礼拝「礼」，喜捨「課」，断食「齋」，巡礼「朝」）によってその信仰は体系づけられている。これらはイスラーム信仰の土台であり，回回民族と他民族の大いに異なる根本的な特徴でもある。

イスラームが中国へ伝播する過程で，その前後関係や他地域との影響関係などから，多少の「分派」が見られる。もっとも，イスラームは基本信仰と基本義務では全て同じである。ただ，一部のイスラーム法学派の影響力の相違とそれにとまなう細かい事項の解釈上の違いなどが存在している。雲南のイスラームは，カーディム（格迪目〔グーディム〕）派，ジャフリーヤ（哲赫林耶〔ゾーホーリンヤ〕）派とイフワーン（伊赫瓦尼〔イーホーワーニ〕）派の三つ教派に分れる。

カーディム派は，最初に雲南に伝来した教派であり，「老教」「老派」とも呼ばれている。寛容で柔軟性があるためこの教派は広く伝播され，元、明両朝からはじまり清朝初めまでにはすでに雲南全省に広がっていた。この派は約全省ムスリム人口の90%以上を占めている。主に昭通，曲靖，昆明，大理，紅河，玉溪，楚雄，文山，保山，思茅等の都市部および農村部に分布し，合わせて600以上の清真寺を有している。清真寺毎にそれぞれの教坊を形成し，各教坊（教区）は互いに隷属しない。教坊の重役または幹事もその教坊に所属する人々により選出され，清真寺の管理委員会を構成し，財務および一般的事務を維持する。また，阿訇の招聘は清真寺の管理委員会により決められる（写真1）。

ジャフリーヤ派は，清乾隆年間から雲南に伝播して現在に到り，約200年の歴史がある。1771（乾隆36）年，雲南通海古城の馬雲照（マー・ウィンツァオ）は西北の馬明心（マー・ミンシン）の下で勉強し，「養子」となった。1778（乾隆43）年，馬雲照は勉強を終え雲南へ帰り，ジャフリーヤ派の教えを広めて，「新教」とも呼ばれている。「六大信仰」以外に，門宦（イスラーム教の神秘主義と中国封建制度が結合してできた教団）・教派の教主および教主の「拱北」（墓地或は修道場所）も信者たちに崇敬される。この教派

の教徒は、主に通海県の古城と東渠（トンリヤン）大回村、墨江県の玖聯（ヂューレン）鎮と回輝（ホイホイ）村、弥勒県の竹園（ツウユエン）と小寨（シャオサイ）、箇旧市沙甸の川方寨（ツウアーンファンサイ）、華寧県の盤溪（パアンシ）鎮、峨山県の文明村、または昆明市の回族が集居する一部の街道等に分布している。約13の清真寺と大小合わせて13ヶ所の教坊があり、信者は合計1万人余りである。



(写真1) モスクの内部：信者に説教する阿訇

イフワーン派は、19世紀末に馬万福（マー・ワンフ）が河州（今の甘肅省臨夏回族自治区）において設立し、1920年代初めに、馬万福に学んだ学者たちが雲南で提唱したことで広まった。この教派は、教法にあわない習俗を取り除くことを主張し、経堂教育では漢語とアラビア語とを共に重視する。現在では、全省約1万人を有しており、主に昭通市、魯甸県、箇旧沙甸、開遠及び昆明市の回族が集居する街道に分布している。

## II. 雲南回族の歴史

### 1. 歴史源流

雲南回族は、中国本土で生まれ、生育発展してきたものではない。その先祖の多くは外来のイスラームを信ずる士兵、工匠、商人であった。彼らは雲南に駐留し、防備にあたり、開墾し、商売をしてきたのであり、その源流は唐代にまで遡る。

それを裏付ける資料の一つである雲南（滇）西部に伝わる伝説「三千換八百」によれば、唐朝が回纥（ウイグル）国の兵力を借りて南詔国を討伐した後、回纥の兵士たちが現地の800名の女性と結婚することになった。この子孫が今日の大理回族の祖先といわれている。また別の資料、『新唐書』巻222の『南蛮伝一・南詔伝』の記載によれば、唐貞元17（801）年には、唐は南詔と連盟して、南詔で吐蕃の大食兵と争った結果、吐蕃（トバン）、大食兵が敗戦して、黒衣大食兵及び吐蕃の大酋約2万人が投降し、捕虜となった。

『元史』の記載によれば、1219年に成吉思汗が西アジアを征服してから、1258年に旭烈兀（シュウ・リエウ）がバグダッド（バグダック）を攻め落とし、モンゴルの貴族たちが前後して葱嶺（ソウレイ）より西部と、黒海より東部のイスラームを信ずる各民族を征服した。モンゴルが戦争に勝利する度に、大勢の中央アジア、西アジアの各民族、ペルシア

人、アラビア人が東方に住みつくようになった。その中の兵士の多くは「探馬赤軍」に配属され、忽必烈（クビライ）の中国統一戦争に参加した。南宋を消滅させるため、モンゴルの貴族たちはまず「西南諸蛮」征服を計画したのであった。

1253（元憲宗3）年には、忽必烈と兀良合台が共に率いるモンゴル軍と10万人の「西域回回親軍」が南下して雲南麗江（レイコウ）に進入した。麗江納西族の土司（元・明・清代、少数民族の族長で世襲の官爵を与えられた者）が投降し大理国を平定したが、それは回回人が雲南へ移住する最初となった。

1254年には、兀良合台が昆明を撃破した。当時、回族の将軍も次々部隊を率いて雲南に進入しており、各地で守りについた。1316年には、烏蒙（ウモウ）（雲南昭通県一帯に勢力をふるう宋いらいの強大な部族）軍屯を昭通辺りに置き、新たに新軍戸5千戸を設け、屯田1250頃（一頃は約666.7アール）を開墾したが、その中のウイグル人が昭通回族形成の主な起源の一つとなった。

こうした回回の中の一団であった賽典赤・膽思丁親子は、前後して雲南平章政事に就任する際、回回軍を連れてきた。賽典赤・膽思丁の死後、その子孫の一部と回回の兵士は雲南に定住し、回族の一つの大姓となった（写真2）。伝説によれば、通海県納家營の回族は、賽典赤・膽思丁の長男納速拉丁（ナースウ・ラァティン）の子孫である。『元史』の記載では、現在の昆明正義路の南城清真寺と金碧路の永寧清真寺は、両方とも元代に賽典赤・膽思丁が建てたものである。大理城内の玉龍清真寺は、納速拉丁が大理の宣慰使都元帥に就任する時建てた。マルコ・ポーロの雲南旅行紀行中に、「押赤（昆明）城大而名貴，工商甚衆，人有數種：有回教徒，偶像教徒（昆明城は大きく且つ珍しくて貴重であり，工商においては非常に多く，数種類の人種もいる，すなわちムスリムや偶像教徒等である）……」と記載されている。

明清期は雲南回族の大発展期でもあった。明洪武14（1381）年9月には、朱元璋（シュ・ゲンショウ）が溥友徳（フウ・ユウドウ）を征南将軍に、藍玉（ラン・ユエ）と沐英（モク・エイ）を副将軍に任命し、雲南平定を命じた。雲南平定後、溥友徳等の兵を返し、明朝政府は回回人の沐英に数万人の兵士を率いさせその地に駐屯させた。この沐英に従った将士たちの中には数多くの江南出身ムスリムがいた。彼らが雲南に移住した所以はそこにある。沐英は雲南を統治すると共に屯田を重視し、省外から雲南にやってきて、屯田を行う軍民は45万に達成した。その中には数多くの回回兵士がいた。そのため、回回人口は速やかに増加した。同時に、一定の物質基礎が固められるにつれ、次第に民族意識と民族感情が生まれ、その後元代から明の初代までの更なる発展を経て、雲南回族が形成されていった。

1644年には、清の兵士が山海関へ進入して清王朝をうちたてた。明朝の桂王が雲南へ移ると、彼の部下だった湖南・湖北一帯のムスリムも転戦した。その後、今の雲南の騰

沖、保山一帯に定住し、明姓と朱姓等の回族大姓を残した。その後の康熙、雍正、乾隆年間には、雲南東北地区において「改土帰流」という政策を朝廷により実行された。山東、四川の回回兵士の多くは、回族の将軍哈生元（ハ・スニューアン）、冶大雄（イエ・ターション）、許世亨（シュウ・スーハアン）等に従って雲南東北地区に籍をおき、昭通、魯甸、会澤等



(写真2) 賽典赤・膽思丁の墓

数多くの回族村と町を発展させた。清朝前期になると、雲南は既に西北（陝、甘、寧、青）に次いで第二の回族集居区となった。この時期、内地の回族も次々と雲南へ移住した。その中には、商人、砧工、官吏がおり、彼らは更に雲南回族の規模を充実・壮大なものにさせた。同時に、雲南回族と全国回族との間のより緊密な関係関係を結ぶこととなった。

## 2. 発展過程

明代から清朝半ばは、雲南回族において政治、経済、文化の発展ばかりでなく、イスラームそれ自体も大いに発達する時期であった。雲南回族は、定住後の何百年もの安定した発展の中で、水利施設を建設し農業、商業、貿易を発展させた。また、治砧業・文化教育の発展速度もかなり促進された。

この時期には回族人材も多く輩出された。例えば、明代には世界的に有名な航海家、外交家の鄭和（テイ・ワ）（1371～1434）が、船隊を統率して明永楽3（1405）年から宣徳8（1433）年の間に7回にわたって西洋へ赴き、途中南アジア、東南アジア、インド洋、紅海、アフリカの東海岸等を経て、30カ国地域を訪問している。その船隊の規模の大きさ、行程の遠さ、影響の深さ等のすべてにわたって、それは世界航海史上きわめて顕著な出来事であった。

その時期には、才気煥発のムスリム詩人、作家も多く存在していた。例えば、明代には尋甸回族の馬上捷（マー・サンチエ）が『拾芥軒集』を書き、保山回族の馬繼龍（マー・ジーロン）が『梅樵集』を書いている。清代では、昆明回族の孫鵬（ソン・パン）が『少華集』、『錦川集』、『松韶集』を著し、大理回族の沙琛（サー・スン）が『点蒼山人詩抄』を書いている。イスラームにおいては、雲南第一位のムスリム学者である馬注（マー・ツウ）（1620～1711）が出現した。彼は保山人で全国を遊歴し、またイスラームの経典や古

籍を研究して『清真指南』を書き上げた。その影響は強く全国各地及んだ。一代の経師である馬徳新（マー・ドゥシン）（1840～1903）は、イスラームに関する著作と翻訳を30部以上も書き上げた。イスラーム経堂教育家の馬聯元（マー・レンユアン）（1840～1903）は、雲南経堂教育の発展と革新を行い、初めて「経書並授」の主張を提言した。彼は伝統経堂教学について独創的な見解を持っており、数多くの教材を編纂した。

道光20（1840）年には、アヘン戦争が勃発し、中国社会は次第に半植民地封建社会へと凋落した。清政府は民族間の摩擦を利用して卑劣な手段を取り、続けざまに回民に対する惨殺事件を起こした。比較的大きな事件として、1821年の「雲龍白羊羊厂事件」、1839年の「緬寧事件」、1843年の「永昌事件」、1844年の「順寧事件」、1847年の「姚州事件」、1850年の「他郎事件」等がある。回民はその生存を賭けて、次第に連合して「反清の戦い」を展開するようになった。

1856年には、滇西の回族は杜文秀（ドゥ・ウエンシュ）を指導者として、正義の旗を揚げ武装蜂起した。民衆の支持を受けて雲南西部をほぼ統一し、大理政権を成立させた。それは、清朝政府の暗黒統治を強く動揺させ、雲南史上における農民革命運動の頂点にまで達した。杜文秀蜂起の影響を受け、清南新興（玉溪）、臨安（建水）、澄江、昆明等地域でも馬復初（マー・フウツウ）、馬如龍（マー・ルウロン）等が回民を率いて反清闘争を展開した。

杜文秀がうちたてた大理政権は、回族の將軍たちを中核とした各民族連合政権であるため、回族は権力をにぎる立場に置かれていた。しかし、杜文秀は積極的に民族平等や、各民族の風俗習慣を尊重するような政策を推進した。漢人を重用する措置を制定し、比較的廉潔且つ威信ある政府を樹立した。同時に、戦争環境の中でも農業生産の回復に関心を持っており、できる限り賦税を軽減し、水力工事を起こした。さらに、商業と対外貿易を発展させ、人民生活に一定の改善をもたらした。そうした諸政策が相対的に安定した政治局面を創り上げた要因の一つであり、それらは民族関係の改善や民族団結の実行等における政治的経済的土台を築いた。

杜文秀蜂起が失敗に終わった後、満清政府は回族に対して一種の「民族浄化」を実施した。それは、雲南回族の人口が咸豊年間「丙辰事件」前の80万人（当時の雲南総人口480万の1/6相当）から10万人弱へと激減させられたことから明らかである。清真寺の多くが破壊され、雲南回族とイスラームは厳しく虐げられ大きな打撃を受けた。

辛亥革命前後の近代において、雲南回族における知識分子の一部は新しい形態の発展に適応していった。1908年には清真教育会の創刊した中文刊行物『醒回篇』第一部が東京で出版された。これは近代中国イスラームにおいては最初の雑誌であった。1912年には、北京で「中国回教具進会」が成立され、直ちに雲南では「中国回教具進会滇西支部」が成立した。それらは、清末に遭難した後の雲南民族において、民国期において継続的に善後



処理にあたり、勢力回復、民族内部の団結強化、民族振興等の役割を果たす重要な群衆組織となっていた。

1915年に袁世凱（ユアン・シカイ）は皇帝となったが、雲南回族の一部の愛国者たちは袁世凱政権を覆すための闘争へ積極的に参加していった。1921年に中国共産党が成立した後も、回族の先進知識分子は学生運動を展開させ、農民運動を起し、民主革命の勝利を勝ちとるために貢献した。教育普及においては、1931年に明德中学の学生納忠（ナ・ゾン）、林仲明（リン・ゾンミン）、張子仁（ジャン・ズウラン）たちは、上海イスラーム師範学校の学生馬堅（マー・チェン）と一緒にエジプト・アズハル大学への最初の留学生であった。これらの留学生たちは、建国後に著名な専門学者になった。たゆまない闘争を経て、1949年には雲南回族と全省各民族人民が解放された。政治上においても、回族人民は民族平等の権力を十分享受することができ、民族間関係は改善され、民族団結は強められた。経済上においては、共産党は、改革開放後に農村経済改革を行い、回族人民の商売上手という長所を十分発揮させ、回族の経済発展にとって新たな飛躍的な時代へと向かわせた。経済繁栄にともなって、回族の文化教育事業も更なる発展をしていた。

### III. 雲南回族の文化

#### 1. 文化習俗

雲南回族の生活習俗には様々な特色がある。飲食においては、世界中のムスリムと同様の習慣を保っている。例えば、豚肉は食べることを忌み、いっさいの動物の血と屠殺によらず自然に死んだ動物は食べない。また、酒を飲まない等である。食用牛、羊、鶏、鴨を殺す時にも、阿訇の立会いをお願いする。普段の会話の中では、「豚」（ツウ）を言うことは禁忌し、油脂多い牛羊肉に対しても「肥」（フェイ）と言うことは忌避し、その代わりに「牡」（ツウオン）といわなければならない。

服飾においては、普段の服飾は基本的に漢族の服飾と同様である。相対的には少数であるが、白、彝、傣、藏族と似ているものもある。しかし、祝祭日や礼拝をする時には、一般的男性は白い帽子をかぶり、女性はスカーフ風の髪と首を被う頭巾をかぶる。ジャフリーヤ派の場合、男子は黒い六角形の帽子をかぶるが、女性は帽子を用いない。

回族家庭の室内では、通常アラビア文字で書かれた書画が掛けられている。また、回族の家庭には必ず一つの小さな「水房」（スイファン）（礼拝前に沐浴の用を足す部屋）がある。回族は日常生活の中では、飲食や服装の衛生を重視し、常に身体の清潔さを保っている。

回族の主な民族祝日は、開齋節（カイサイチェ）、古爾邦節（クルバンチェ）、聖紀節（スンジーチェ）の三つである。祭日期間中、男子はきちんとした服装を着て、清真寺に

集まり、礼拝し、教長による教義の教えを聞き、お互いに祭日の祝いをする。その後、家に帰って家族一家と会食したり、親戚や友人とお互いに訪問祝賀しあう。

雲南回族では、一夫一妻の婚姻制度を実行している。一般的には、回族は民族内婚をおこなっているが、社会的交際が増加するにつれ他民族と通婚するケースも増えている。ただその場合、相手が回族の生活習慣に従わなければならない、結婚する時はイスラームに改宗しなければならない。

婚約する時には、大変人望が厚い長者または阿訇を招いて証婚人（媒酌人）としている。証婚人の引率の下で、牛羊肉やお菓子等贈り物を持って女性の家で婚約儀式を挙げる。まず、阿訇は『古蘭経』（クルアーン）の一部を読み祝福する。それから、男女の経名を経名簿上に書込みする。そこには阿訇や証婚人もサインしなければならない。それを婚約証明とする。

結婚する時には、新婦は新郎の家に出迎えされた後、新郎の方が宴をはって客をもてなす。その際、阿訇が「尼卡哈」（ニイカーハ）（証婚詩）を唱え、その婚姻が合法であることを証明する。その後、阿訇は新婚夫婦に祝いの言葉を送る。それと同時に「講経」して、お互いに愛し合うことや助け合うこと、親に孝行すること、勤儉に家事をきりまわすこと等を諭す。最後に、阿訇が「堵瓦」（ドゥワ）を唱え、アッラーに感謝する。

回族は土葬をおこなう。一般に、朝に「帰真」（他界）した場合には夜に埋葬する。夜に「帰真」した場合には、翌日に埋葬し、死体を三日以上とどめておくことはできない。死者の「売提」（遺体）は、まず家または清真寺に置き、同性の同輩が死者の全身を洗い、大小合わせて三枚の白布で包む。清真寺から借りた「経匣」（霊架）に遺体をのせ、墓地に運んで埋葬する。遺体を仰向けにして土の穴に入れ、頭は北、足は南、顔は西に向けるようにして、土を盛り上げて墓をつくる。一部の人は墓地の横に木を植え、それをしるしとし、また一部の人は死者の姓名、生没年月を刻んだ漢文碑をたて、墓碑の上に『古蘭経』の一節をアラビア語文字で刻む。亡くなってからの三日目、七日目、四十日目に、阿訇を招いて念経祈祷し、親戚や友人を粗飯でもてなす。毎年の開齋節と死者の逝去記念日には、親戚一同墓地へ行き「上墓」し、悼みの意を表す。

## 2. 経堂教育

雲南回族先民は、中国へ進入した後、伝統漢文化を積極的に吸収し、漢文化教育を受けるようにしていた。同時に、イスラーム文化と漢文化を全て受け入れて融合し、イスラームの伝統文化を主とする信仰教義に関する経堂教育を形成させた。

経堂教育とは、清真寺の中で阿訇が一定数の学生を募集し、イスラームの経典を勉強させることである。それは、一種信徒共同体の人材を育て、イスラーム文化の伝承を主要な目的とする信仰教義に関する教育である。

経堂教育の創始者は、陝西咸陽渭城人胡登洲（フウ・タエンツォウ）（1522～1597年）である。彼はマッカ巡礼帰国後、国内のイスラームは「経文匱乏，学人寥落，既伝譯之不明，復闡揚之無自」（経文が欠乏し、それを学習する人も少なく、また正確な翻訳がされていないので、ひろめることもできない）といった状況を見て、経堂教育の設立を決心した。彼は、中世イスラーム諸王朝における、モスクを校舎とする学校（マドラサ）の創設方法と、中国における伝統的な私塾教育形式と結合することを提唱した。しばらくの後、この教育方式は各地の回族集居区にまで普及し、金陵学（山東学派）、陝学（陝西学派）、滇学（雲南学派）、魯学（江南学派）という四大学派を誕生させた。

滇学派は中国四大経堂教育学派の中で唯一中断しなかった学派であり、極めて突出する貢献をした学派であった。中国明清期に「四大イスラーム経学大師」（王岱輿〔オウ・タイヨ〕、馬注、龍智〔ロンズ〕、馬徳新）と呼ばれた四人の内、馬注、馬徳新の二人は雲南出身である。また、馬徳新はその四人の中で唯一アラビア語圏へ行った経験がある学者である。

雲南学派は、中国儒家文化とイスラーム文化とを最も深く結合した学派となり、馬注、馬徳新、馬聯元の漢文翻訳著書（例えば、馬注の『清真指南』、馬徳新の『四典要会』、馬聯元の『孩听訳解』）から、それらを知ることができる。雲南はイスラーム文化の伝播やイスラームを中国化とする中心となっている。清朝期には、雲南回族の経堂教育は隆盛し、一つの完璧な制度までに発展した。清真寺を校舎として、各地の品格が高く声望があり、且つ学識が深く広い経師を招聘して、教学を務めさせた。雲南回族の経堂教育は、西南または全国のムスリム地域にまで広く影響を与えた。雲南で育て上げられた「阿訇」は、全国各地に就任しており、イスラームの発展においては多大の貢献をしてきた。それは現在においても依然として変りはない。

清朝末期には、回族人民を主体とした「反清」蜂起が起こった。蜂起が鎮圧された後、清政府は回民に対して「民族浄化」を起し、多くの回民が惨殺され、人口が激減し、氣勢が壊される一方、雲南の経堂教育も低潮に落ち込み、このような状態はずっと辛亥革命まで続いた。その後、雲南回族清真寺を中心とする経堂教育が次第に発展し、「中阿並授」（中国語とアラビア語とで共に授業する）形式を取り入れ、漢文に対して疑い恐れることなく用いることが定着した。馬徳新、馬聯元等につき、王家鵬（ワン・ジャーポン）、馬安義（マ・アンイ）、馬安康（マー・アンカン）、田家培（ティエン・ジャンペイ）等の近代雲南著名「四大経師」を輩出した。

伝統的な経堂教育は歴史潮流に合わないため、雲南回族は1921年に初めてのイスラーム新興学校——高等経書併授学校を開校した。それは昆明の何か所の清真寺が連合して創り上げた学校である。この学校の第二期学生卒業後、第三期から私立明德学校へと改名し、1929年に中等部を設立した。そして、アラビア語専修部を設け、北平成達師範学校

と南北互いに呼応することになった。明德中学校から卒業した多くの学生は外国へ留学し、その中には、林仲明、馬堅、納忠、林興華（リン・シンファ）、納訓（ナ・シュイン）等後に有名な学者となった人々がいた。民国年間、全省各地のアラビア語学校の全てが「中阿併授」の形式に近づいていた。その中の例として、沙甸の「養正学校」、「玉溪育才学校」、「私立原武学校」、蒙化の「興建中学」等がある。

20世紀90年代から、雲南回族の経堂教育は新たな方向へと向かった。国民学校の管理模式を真似して創り上げた「中阿併授」の学校が次々と現われ、これらの学校は継続的に漢語のほかに、自然科学や社会科学等の課程も増設した。一部経済条件が良い地域では、コンピュータ課程も設置された（写真3-4）。

管理方式においては、一部の学校では「清真寺民主管理委員会の指導の下での校長又は校長責任制」の方針を採用した。例えば、恵光基金が出資して創建した「恵光小学校」（これは一種「公営民助」形式である。その特徴は、国民の学校の中にアラビア語課程を加えることであり、回族の子供たちに小さい頃から二つの言語教育を受けさせることを目的としている）、大理ムスリム文化専門学校、硯山県平遠鎮の松毛坡中阿学校、昭通中阿学校、通海県納家営伊斯蘭文化学院、通海県納古鎮古城中阿学校、開遠アラビア語中等専門学校等がある。

過去においては、『古蘭経』を読むことと礼拝ができることが、主にアラビア語の教学目的であったが、現在のアラビア語教学目的は、それだけにとどまらず、国際化へと突き進もうとしている。そのため、これらの学校から卒業した優秀な学生たちは、直接海外留学へと送り出される。現在、雲南ではこれらの学校を卒業した後、エジプトの「アズハル



（写真3）沙甸清真女校



（写真4）清真女校の女子学生

大学」とサウジアラビアの「マディーナ大学」に留学する学生が大勢いる。

### 3. 経済生活

元代、雲南回回の経済生活には、農業を主とする雛形が基本的に整えられていた。彼らは長期にわたって屯田活動に従事し、元政府が軍戸と回回官吏に有利な政策を実施することによって、回回は次第に定住生産へと転換した。彼らは水利を重視し、伝統的な治水経験と雲南各地の山川の地勢を結びつけ、真面目に経験を汲みとりながら現地の人民と共に系列水利工程施設を建設した。元代、雲南の回回は農業を主とする経済生活以外に、手工業、採鉱業、商業運送を兼業した。

雲南は豊富な鉱産資源を保有しており、現地では多くの回族が「鉱丁」（鉱夫）として募集され、それと同時に人力と「馬馱」（馬の背中に荷を積む）方式を利用して運送をしている人もいた。生産技術が不断に高まるにつれて、技能に優れた回回の工匠が現われ、これらの伝統技能も代々と伝承されるようになった。通海の納家營、古城と三家村では、今でも「小五金」（小五金物）を製造する伝統的な技能が伝承されており、そのことは遠くにまでよく知れ渡っている。

明朝の雲南回族は、主要な生活手段として農業と手工業に従事した。これも当時の「屯戍政策」によるものである。雲南では、明朝年間に軍屯を実行する以外、民屯と商屯を大いに推進し、屯田はほぼ全省まで普及した。その後、土地の兼併が重なり、官僚や地主たちが多数の土地を占有した。土地を失った回族の手工業は主に製薬業と製磁業、また鉱山を採掘することである。

また、雲南の山々は群がり密集して交通不便のため、長短距離運搬の回族馬幫を雇用することがよく行われるようになった。彼らは品物を仕入れて各府県間に運び売り、さらにラオス、ミャンマー、タイ及びインド等の東南アジアの国々を往来した。

元、明以来数百年の苦しい起業形成期を経て、清朝になると雲南回族は農業作物を主とした商品生産の発展と商品流通を重視するようになった。回回民族は昔から商売が得意であり、雲南回族の経済は、主に馬幫貿易、飲食、金属と皮製品の製造等を中心に形成されていた。その中でも、上述のように馬幫貿易は、雲南回族の対外貿易を発展させる一種重要な形態となっていた。

雲南回族の馬幫と商号は数えきれないほど多く、民国期以来「原信昌」は特に目立っていた。「原信昌」は通海県大回村の回民である馬同恵が昆明で開設した一つの大商号であり、1919年に、内地で商売を発展させるために、彼は墨江で「源馨齋」という雑貨店を開いた。昆明から百貨、布、綿糸及びタイ、ミャンマーの商品を墨江（モージャン）まで運送し販売し、墨江で水溶天然ゴム、牛革、羊革を買いつけて昆明まで運んで売る、という商売であった。1921年には、思茅（スーマオ）で「原信昌」雑貨店を開店させた。そ

の後、彼は更にほかの地方でも商号を開設し、タイ、ミャンマー、ベトナム、ラオス、雲南を一つの貿易ルートとして連結させた。その信用を基にして、物資と資金を運用した。同時に、昆明の「福林堂」の専門家李福初の下で、各種貴重な薬材の識別方法を身につけて、薬材販売も始めた。中国解放後、彼から政府へ渡した黄金だけでも数千両に上った。彼の一家は大回村で三棟の大きい屋敷を建て、その第二棟の建物は「建築の彫刻精品」といわれている。第三棟の建物は洋式であり、建築材料は全て海外から輸入し、当時の彼がいかほどの金持ちであったのかもそこから容易に想像できる。

これ以降、雲南回族の経済における顕著な特徴は、貿易と工、商を主とすることにある。その中でも「対外貿易」は特に注目されていた。対外貿易への参加者の多さ、はるか遠くにまで及ぶ貿易ルート、顕著な貿易効果の現われ、それらは雲南の多くの民族の中でも、いわゆる回族独自の風格となっている。地理的位置からみれば、昔から雲南は既に南方シルクロードの中間駅にある要衝であり、人々にとって「外貿」は重要且つ必須である。雲南の産物は経済帯からみると、ちょうど温帯と熱帯、東アジアと南アジア、極東と中東の間に位置し、他人が必要とする産物を所有しているばかりでなく、「販負転運」（販売と運送）もその地理的位置から一種天然的な職責となり、この職責を完成させるために商人が必要とされてきたのである。歴史上、内地の絹、紙、茶、器、工具は、雲南を経過して東南アジアへと進入し、東南アジアの宝石、玉、薬材、皮革、綿も、雲南を経過して奥地に入る、つまり雲南回族は生まれつきの長途商人（遠距離の交易を行う商人）なのである。

回族特有な技芸である鍛冶屋、武器作り、大工などの業種は採鉱業に適合しており、雲南では「無鉱不回」（鉱山の経営者はほとんど回族出身）までに言われる。採鉱業に関連し、農具、器、武器の製造などを主とする五金手作業の仕事場は、回族の集居地で生まれた。

また、回族の生活習慣、例えば、飲食の禁忌は、実は、回族の人々が商業、貿易と食品加工に従事することにおいて有利な条件となっている。つまり、飲食禁忌によって回族は生まれつき強い忍耐力をもち、野外でも炊事ができる。それらは回族が従事していた長距離運送運搬には大変役に立っていた。さらに、回族は大分散、小集中のために、ほとんどの集居地では、回族に奉仕するための旅館が設けられた。その旅館は回族飲食業の始まりであり、回族経済における一つの特色ともなっている。雲南は辺鄙な位置にあるため、封建王権の勢力は全地域にまで及ぶことは難しい。ある地方、特に辺境地区は、王権勢力の真空地帯となっていた。さらに、雲南はミャンマー、ベトナム、ラオスの境に接しているため、貿易に大変有利である。それらは、清初から半ばまでに、あれほど多くの回族商幫、商号が「民商」という形式で発達したのかという要因になっている。しかし、内地では官僚と連結しないで莫大な富を手に入れることはほとんどできない。これらの特性は商

品経済が繁茂する温床となっており、回族経済はこのような環境の下で発展した。当然、回族の民族特性や回族人の心理的潜在する素質、宗教信仰、価値観等も関わっていたものの、これらこそが回族経済の独特な魅力を創り上げたのであるといえよう。

現在の回族も祖先たちの商売特長を相変わらず継承し、雲南各地に居住している回族の一部の人々は農業に従事しているが、その多くは運送業に付いている。多くの地方において、交通運送業はほぼ回族に壟断されているのである。例えば、洱源县では三つの村にいる回族が持っている車の台数は、別の県の自動車総部が用いる車の全台数と同じである。ある地方では、回族が独立した工業区を形成している。例えば、通海県の納古鎮、個旧市の沙甸等。通海県の納古鎮を例として見てみると、納古鎮は納姓を主とする回族の集居鎮であり、その祖先である納数魯は賽典赤・膽思丁の長男納速拉丁の子孫である。その子孫たちは納古鎮に定住し、彼らは各種の兵器と他の器具を製造した。数百年の発展を経たにもかかわらず、彼らの伝統技術は伝承され、彼らの世々代々も金属に関する仕事をし続けた。今日、ここは金属加工と製造を中心とする工業区になっている。

これらによって、雲南回族文化は、一種の宗教信仰や一種の意識形態であるばかりではなく、一種の社会制度や生活方式でもあり、日常生活と社会関係及び心理素質、価値観等の各領域にまで決定的な影響を及ぼしている。新しい環境に適応し、さらなる生存と発展のために、回族人はその開放的な姿勢を以て中国文化の薫陶を受けつつ、自らの文化の再建を始め、その独特の歴史と文化を鑄造してきたのである。

### 参考文献

- 白寿彝 1952年『回民起義』第1冊 神州国光出版社。  
—— 1983年『中国伊斯蘭史存稿』寧夏人民出版社。  
編纂委員会 1978年『回族簡史』寧夏人民出版社。  
—— 1985年『雲南回族社会歴史調査』(一)(二)(三)雲南民族出版社。  
楊兆鈞 1994年『雲南回族史』雲南民族出版社。  
納麒 1999年『伝統与現代の整合：雲南回族歴史、現状、発展論綱』雲南大学出版社。  
納文匯、馬興東 2000年『雲南回族文化史』雲南民族出版社。  
高発元 2003年『雲南回族50年』雲南大学出版社。

邦訳／徐幟（愛知大学大学院文学研究科博士後期課程）  
2003年3月10日(月)第23回国際学術交流プログラム・  
第4回イスラームにおける中国研究会  
於 愛知大学豊橋校舎5号館4階543会議室